



幻想異郷伝  
〈上〉

体験版

DOJIN  
R18  
成人向け

18歳未満の  
購入・閲覧禁止



これはもう一つの幻想郷の物語

目次

あとがき			
	第二章	第一章	序章
	遡りし魂	幻想郷崩壊	
105P	71P	11P	5P

【序章】

太陽がゆつくりと山間に向かう頃、人間の里の大通りは夕飯の献立で悩む女たちであふれかえる。ここに畑帰りの男たちと遊び終えた子どもたちが突入してくるのだからもはや收拾は不可能に近い。

八百屋や肉屋は人の垣根ができ、押し合いへし合いの格安商品獲得の戦いが始まる。また素早く材料を手に入れた人々はさっそく調理に入り、炊き立てご飯の甘い香りと魚の軽く焦げた匂いがそこら中から漂ってくる。それを嗅ぎつけ腹を鳴らす子どもたち。その小さな手を引き、足早に母親は家に向かう。

いつもと同じ変わらぬ夕方。

どこか遠くでほら貝の音が響く。

「おい、あれ」

数人の里人がそれに気付く。情報は波紋のように人から人へ伝わり、たちまち大通りを駆け巡る。里の北側、妖怪の山がある方向から白い霧が迫ってくる。境界の柵

を越え、里外周の畑を飲み込み、それは遂に里中を包む。

「なんだこれ」

妙な息苦しさを覚え、人々は不安に辺りを見渡す。濃霧は人々の視界を遮り、わずか数メートル先も覗かせない。唯一見えるのは里中央にある高い杉の木の頂点くらいだろうか。

ばきや。

ふいに細枝を折るような音が聞こえる。一人の男が倒れた。近くに居た者が側に寄る。おい、どうした。声をかけ身体を揺さぶる。すると男の側で西瓜のようなものが転がった。悪い視界の中、村人の一人が目を凝らしそれに近づく。

「な——」

言葉を失う。

人間の頭部だった。

「ひやあああああああああああああああつ!!」

幾人かが叫び声を上げれば、それに感化されたように周囲にも動揺が広がる。

「なんだ!? どうしたんだ!」

「ひ、人が死んでいるらしい!」

【序章】

「ば、なんでそんな——」

ざわめきは突風によって黙らされた。

人々は反射的に目を瞑り、腰を低くする。

子どもたちは母親の足にしがみつき、出店の店主は看板が飛ばされないように体全体で抱きしめる。里の中心に向かつて吹いたその風は里中央に生える杉にぶつかる、方向を変えて一気に天を昇る。

「な、なんだったんだ？」

「ねえ、ここに居た人は？」

「あれ？ 雨？」

ぼっと頬を伝う水の感触を拭う男。指先についたのは真つ赤な鮮血だった。

ぼつ、ぼつ、ぼつ。

杉の木を中心に天から降り注ぐ血と臓物の雨。数人分のそれは杉の木を人の皮と肉で飾り付けするには十分で、里のシンボルであった緑の葉は赤に染め変えられた。

声も出せない恐怖の中、人々はその頂点に立つ人影を認める。

頭部にはねじれた木の根のような双角、鋼のような筋肉質の身体つき、麦色の髪は腰まで伸びその先端は白い

霧へと同化している。

「——鬼だ」

伊吹萃香。

かつて妖怪の山を支配していた四天王の一人。双角の食人鬼は割れるような笑みを浮かべながら、犠牲者の腿肉を喰ひ千切る。

枝から一つの頭部が滑り落ちる。それが足元まで転がった所で、ようやく一人の女が悲鳴を上げた。

「殺した！ 殺したのか!？」

「巫女だ！ 巫女を呼べ!!」

右往左往する人間を一瞥し、萃香は手首の鎖を振り回す。どういう理屈か伝説に聞く如意棒の如く伸びた鎖は霧の中を駆けていた一人の女に絡みつく。一人の男が何とか鎖を外そうと組みかかる。だが何重にも巻かれた鎖はピクともしない。萃香が腕に力を込めて鎖を引く。みりみりと締まりゆく鎖に女の顔が苦痛に歪んでいく。すでに言葉を吐くのもつらいのか、はくはくと口を開閉させ青い顔で男にすがる。

「た、助け……っ!」

ばちゅ。

## 【序章】

そんな音を立てて、女性の身体は鎖に潰された。

「ぎあああああああああああああつ!!」

「——ひいつ!」

ずりずりと這い寄り男にすがりつく女。胸と腹を半端に切り離され、その断面からは内臓が垂れ幕のように伸びている。助けを求めると腕を男ははたき落とし、身を翻して霧の中を逃げ出した。その様を睥睨し雷鳴のように萃香は笑う。

「貴様っ!!」

きつい怒号が萃香の背中に突き刺さる。そこに居たのは人里に住む半獣、上白沢慧音だ。悲鳴に寺子屋から飛んできたのか、その指先はチョークで白く汚れている。

「おやおや、半獣の先生。こんばんは。どうだい一杯やるかい?」

頬杖をつきながら瓢箪の栓を抜く萃香。

「ツ……なんのつもりだ。説明をしてみらおう」

ツバと共に怒りを飲み込み慧音は問いかける。恐らく何か事情があると頭の隅で考えたためだろう。まさか戯れでもあるまい。何かしらの理由、例えば誰かの報復などを可能性の一部と考慮してのことだ。目の前の一事で

物事を判断しないのは流石教師といえる。

しかしそれは、相手と自分との間に普通の理屈が通じること前提とした話だ。

ガリッ。

足の骨をかみ砕き、萃香は嗤う。

「獣が肉を食うのに理由があるのかな?」

「なっ——」

次に慧音から飛び出したのは抗議の言葉でも、憤怒の声でもなく、腸と皮膚の一部が絡みついた萃香の指先だった。肉と爪の隙間から赤黒い鮮血がポンプのように溢れてくる。華奢な身体は流れ出す生命の欠片に堪らず膝を折る。痛みと出血で震える腕で身体を支えながら慧音は萃香を睨みつける。

「お、頑丈だね。伊達に半獣じゃないか。結構結構」

「な、何をするつもりだ? お、お前は……何を! この里に何を!!」

「教えてあげよっか? あと、お前じゃなくてお前たちだね」

霧の中に溶け込んだ萃香は、一瞬にして慧音の目の前で寝そべっている。

「殺すのさ」

息がかかるほどの距離で葎香は笑みを浮かべる。鮫のような鋭い牙がその口からは覗いていた。

「全ての人間を冒して殺して——そして喰らう。そう。妖怪跋扈した遙か昔のように」

一人の男が里から逃げる。友を押しつけ、家族を捨て、里の外へと通ずる道をひた駆ける。里を覆う垣根を越えて、土肌を蹴り続ける。途中、垣根で足を切ったがその痛みにはすら気づくことはない。そして、いつの間にか背後から聞こえていた羽音にも男は気付かなかった。

「あやや。友人家族を見捨てていの一番に逃げ出すなんて。なかなか見所ありますねー。ご褒美に苦しまずに殺してあげますよ」

「——いっ！」

彼が振り向き空を見た時、獐猛な風が吹き荒れる。

一瞬にて鎌鼬と変じた風は、男の身体を等間隔で通り過ぎた。

男は走り続ける。

血液の表面張力で繋ぎとめられていた身体は、一歩進

むたびにズレていき、やがて悪趣味なダルマ落しの如くゴロボロと崩れ落ちた。

「ば、馬鹿な！ なぜ天狗様が！」

その光景を遠巻きに見ていた者も、男に次いで逃げ出した者も、顔を歪めて恐慌に陥った。

ウソだ。有り得ない。なぜなぜなぜ。

無数の疑問が投げかけられる。それに応えるように人間の里を包囲していた天狗たちは茂みの中からゆつくりと立ち上がる。

犬のような耳と尾を持つ白狼天狗、射命丸と同じ黒い羽を持つ鴉天狗、まるで巨人のような体躯の大天狗まで居る。

彼らの顔に浮かぶのは嗜虐的な笑み。

神として崇められた時でも、隣人として親しまれた時でもない。山に住まう殺戮者として恐れられた妖怪天狗としての顔。

「総員行動開始。一匹も逃がさないでくださいよ」

射命丸の言葉をきっかけに天狗たちは歓声を上げて里へと殺到する。

鳴り響くほら貝の音。





白狼天狗の千里眼と鴉天狗の素早さから逃れられる人間などいるはずもない。

押し寄せる妖怪の姿に、里人は久しく忘れていた感情を思い出す。

恐怖と絶望。

ああそうだ——、妖怪に対してそれ以外の感情など持つてはいけなかったのに。

太陽が沈む。

まるで里そのものの色が変わったかのように闇が人々の影を食っていく。

## 【第一章 幻想郷崩壊】

### 【第一章 幻想郷崩壊】

神社の空から里を見た。

まるで鬼ごっこをする子どものように人間を追い回す天狗たち。手に持った白刃を振り抜けば、その身体はいつも簡単に切り裂かれてしまう。花火のように散る赤い鮮血。倒れた者の中には未だに蠢いている者も居て、管のように伸びた内臓を引きずりながら切り離された半身を求めて這いずっている。

まるで出来の悪いサイレントフィルムのように現実味の無い光景。それを呆然と見ていた霊夢は、はっとしたように空を駆け出す。

「あ、あいつら！ どういうつもりよ!!」

猛烈な風を浴びつつ霊夢は自らの懐を探る。対妖怪用の針は合計29本。呪符の残りは40枚ほど。他の武器は手に持った祓い棒のみ。

「くっ！ ケチらず用意しとけばよかったわ!」

「全くね。普段からちゃんと準備していないから慌てる

ことになるのよ」

「っ?」

突如として目の前に開いた裂け目に霊夢の足は止める。空間を押し分けその裂け目は体積を増して行き、やがては人間をすっぽり覆うほどに広がっていく。そこから溢れ出したのは金の髪。場違いなほど明るい洋風の傘を片手に姿を現したのは《妖怪の賢者》八雲紫。

「やつほー霊夢」

「……なんのつもりよ紫。里の様子が見えないの」

「それがね。家の茶葉が切れちゃったの。私ってば一日三十杯はお茶を飲まないと眠れない性質だから、昨日なんて夜しか寝てないのよ。だから霊夢にご馳走になるうと思つて」

「残念だけど今朝から博麗神社のお茶はセルフサービスよ。茶葉は台所のタンスの中、急須はちゃぶ台の上。飲んだ分だけ神社の賽銭が潤うという不思議システムになっているから何杯飲んだかちゃんと数えときなさいよ」紫を避けて進もうとする霊夢。だが紫はスキマをずらし、その前へと立ちはだかる。

「んもう、欲張りね。あんまりケチだと貧乏神が来るわ

よ？」

「なら殴つて泣かせて追い返すだけよ。もちろん身包み剥いでね」

「乱暴ねえ。とても正義の巫女さんの言う事とは思えないわよ」

「ハンムラビ法典にも書いてあるのよ。目には歯を。歯には牙を。邪魔する者には鉄槌を。巫女の道理は世界を覆すのよ！」

祓い棒が一閃。紫を目がけて振り下ろされた。

その一撃を、宙を蹴つて悠々とかわす紫。

「予想の内！」

祓い棒を振り下ろす勢いのまま足で宙を捉え、三步の距離に離れた紫めがけ右足のかかとを振り抜く霊夢。

衝撃音。

人間相手ならアバラを折るような霊夢の蹴りは、取り出された扇子によって受け止められている。

「悪企みにしても度を越えてるわよ！ あんた、それがわかってんの!？」

「あら。それでいいのよ」

紫の言葉に霊夢は動きを止める。

紫はただ不敵な笑みを扇子の裏側に湛えている。

「全てはこの幻想郷のため。必要なことなのよ」

ぐいと扇子を押し出した紫に、霊夢は宙を跳ね飛び距離を取る。

姿勢を取り直し、紫を睨む。

「説明しなさい紫」

「どうせ納得しないわよ？」

「だからって、はいそうですかって引き下がると思つてんの？」

「あら。目の前で誰が死のうが関係ないんじゃないの？ 貴方にとっては」

その言葉に霊夢の瞳がぎゅっと狭まる。

だがそれに気付いていないように、紫は一切の感情を出さず言葉が続ける。

「当代の博麗の巫女、博麗霊夢。貴方の役割は何？」

「……それは」

「妖怪退治、とでも言うのかしら？ 確かにそれも仕事の一つ。でもね。それはあくまで“手段”。幻想郷を維持すると言う（目的）のための、ね。そうでしょう？」

扇子を広げ、紫は目を細める。

## 【第一章 幻想郷崩壊】

金色の瞳の中に霊夢の髪だけが黒く映る。

「人里への妖怪の流入。妖怪社会への人間の進出。科学を広める神と人妖平等を唱える僧侶。外の世界は世界の隅々を洗い出し、なおも満たされずに天地の最果てを目指す。もはや月の地すら幻想ではない。人喰いが廃れ、幻想郷の中でさえ妖怪は力を失いつつある。全ては人が妖怪の恐怖を忘れてしまったから。ならば、どうすればいいか」

道化師めいた動作で紫は回る。まるで幻想郷の全てを眺め見るように。

「答えは美に簡単。その恐怖を取り戻せばいいだけのこと」と

「っ!?! あんたは!」

霊夢の手から放たれた弾幕を紙一重で避ける紫。余裕のその顔めがけ霊夢はさらに弾幕の針を放つ。

「もっと緩急を付けなさい。教えなかったかしら?」

高い破裂音を上げ、大玉の弾幕が紫の扇子に叩き潰される。弾幕の残滓が散る中、紫の姿が消えた。

「——っ!?!」

「ほらほら。ブギーマンが来るわよ」

否。消えてはいない。まるでフラッシュを見ているかのように、刹那の時間の中で居場所を変えている。

スキマをつかった移動そして攪乱。

神に等しい力を持つ紫にしてみればほんの戯れ事に過ぎない業だが、所詮は人間の身に過ぎない霊夢からしてみれば十二分に脅威だ。予備動作一つなくスキマを駆ける紫に、左右の目が付いていかない。

右、左、上、下、そして完全に消える。

「っ!」

「お見事」

背後からの一撃を防ぐことができたのは、底冷えする直感に助けられたとしか言いようがなかった。

「博麗霊夢。貴方は博麗大境界を維持するために存在する」

「ぐっ!」

右腕で受け止めた傘は、巨岩と思うばかりの重さ。

身体能力に関して紫は並みの妖怪程度しかないと聞く。怪力無双の鬼やフラワーマスターとは比べるべくもないが、逆に言うなら並みの妖怪程度の力はあるということだ。

「貴方は本来誰の味方でもない。誰も愛さず誰も信じず誰も顧みない。それでもなお逆らうというならば」

咄嗟に張った結界。霊夢の腕と傘をわずかに隔てるそれはすでに軋みを上げている。紫は重力の利を活かし、霊夢の上側へと身体を滑らせる。ギリギリと光子が弾け、髪先ほどずつ二人の距離は狭まっていくな。金を溶かしたような深い瞳が霊夢を飲み込まんと見つめていた。

「答えなさい。貴方は何を選ぶの？」

「——！！」

瞬間、光が爆ぜた。

「なに！！」

紫の手が離された瞬間、霊夢は身を翻して地上へと駆ける。そして大地に激突する寸前、霊夢の姿は霧のごとく何処かへと消えた。

「……結界を破裂させるなんて相変わらず器用ね。そして自らを〈空〉として身を隠す。本当、憎たらしいほど優秀だわ」

『空を飛ぶ程度の能力』。空中へと浮かぶことはもとより、霊夢はこの世界からも離脱し、宙へと至ることができる。それは誰にも触れることのできない絶対の領域へ

踏み込むということに等しい。霊夢が本気で、空を飛ぶ時、たとえ紫ですら手出しはできない。できるとすれば真に神に等しい力を持つ者だけだ。

だが、能力を駆使し空へと逃げてみればこの世界に戻らねばならない。紫はゆるりと待てばいいだけのこと。霊夢の力量から逆算して完全に消えていられるのはせいぜい五分。ならば——

「紫」

紫の思案は突如響いた声によって遮られる。白い霧が宙に集まり、小さな鬼の姿を取る。

「萃香？ どうしたの？」

「一応ほ——こく。ん——、良い話と悪い話。どっちから聞きたい？」

酒に顔を赤くしながら、萃香は世間話でもするくらいの気安さで話しかけてくる。紫はほんの少しだけ逡巡して前者を選ぶ。

「そうね。良い話から聞きましょうか」

「あーいよ。里への襲撃は完了。五十人くらい殺してきたよ」

「それは御苦労さま。それで悪い話は？」

## 【第一章 幻想郷崩壊】

「あー、何人かに逃げられた」

あつげらかんと言い瓢箪を口へ運ぶ萃香。紫は額に扇子の先を当て、眉間に皺を寄せた。

「どういうことかしら？ 詳しく聞きたいのだけれど」

「藤原妹紅。あいつが乱入して来てさ。んで、何人かと一緒に迷いの竹林へと逃げ込まれた」

「《蓬莱人形》め。予想はしていたけれど」

藤原妹紅。不老不死の妙薬“蓬莱の薬”を飲み、不死者となった三者の一。

千年もの時の間、古いぬ身体で鍛えた肉体と術は天魔鬼神ですら一筋縄ではいかなと言われ、恐らくは人間の中でもトップクラスの実力者だろう。もつとも人間というくくりに入れて良いかは甚だ疑問だが。

「永遠亭との協定で竹林には大々的には手を出せない。

あの中で戦われたら確かに厄介ね。でも、なぜ気付かれたの？ 彼女に兎の耳はなかったと思うけど？」

「河童の作業さ。あいつらがチクつたらしい」

むしろ愉しげ言う萃香に紫は腕組して頭に指を当てる。「あの子たちの人間好き好き病にも困つたものだわね。

でも、それは予想できた問題ではなくて？ それ以前に

貴方が妹紅を対処すれば解決した問題ではないのかしら？」

「だろうね」

「ではなぜ？」

ぐいと瓢箪を煽り、萃香はアルコール臭い息を吐く。

「私の役目は里への襲撃だろ？ レジスタンスへの対処は管轄外だと思っただろ？」

「屁理屈ね」

「まあにー」

爛漫に笑い萃香は空中であぐらをかく。

「……はあ。それで河童たちはどうしているの？ まさか人間さんと仲良くお茶会をしている、だなんて言わないわよね？」

「あいつがやったみたいだよ」

「ああ」

〈彼女〉か、と紫は思い至る。

瓢箪から口を離し、軽く揺らす。紫色の曲線の中から軽い水音が返って来る。

「すごいね。どれだけのことをすればあんなになるんだろうね」

「それは強さについて？ それとも」

「今更聞くことかい？」

萃香の言葉に一つ頷き、

「そうね」

「ほら。一杯やっつけ」

どこからか白磁のおちよこを取り出し、紫に差し出す萃香。黙ってそれを受け取った紫に萃香は酒を注ぐ。

酒の水面をしばし見つめた後、紫は里の方を見る。ある程度の抵抗は予想の内。当然だ。幻想郷を根本から改革しようというのだから反発の無い方がおかしい。

人間に付く妖怪も居よう、妖怪に付く人間も居よう。だが、あれだけの数が揃っていたのだ。萃香の力を借りずとも天狗本来の力なら妹紅とはいえ捕縛できたのではないか。だがそれができず、あまつさえ里の者を逃がしてしまうという体たらく。殺戮の宴に興じて大事を忘れてたと断じるのは簡単だが、それ以上の不吉な予感を紫は感じていた。

——妖怪の力がそれほどまでに衰えているの？

「紫」

萃香の声に紫は顔を上げる。いつの間にか立ちあがっ

ていた萃香は麦色の髪を風に撫でさせながら瓢箪を差し出す。

「あんまり根つめんなよ」

「誰のせいだと思ってるのよ」

苦笑し紫もおちよこを差し出す。こつんと陶器を合わせ、二人は酒を飲み干した。

おちよこを投げ捨て、口を拭う。

「妹紅の対処は私が行うわ。貴方は天狗の指揮を執りなさい」

「あいよ」

短く答えて萃香は霧と化し、夕焼けの中に霧散した。

「五十人……か」

ふいに口走り、紫は苦々しく歯を噛み締める。

「全ては幻想郷のため。そのためなら私は——」

つぶやきは一瞬、紫は人間の里へと繋げたスキマへと身を投げた。



「まずっ!! 何よこのキノコ!? サルのゲロでも詰ま



## 【第一章 幻想郷崩壊】

つてるの!？」

「霊夢下品。まあ、味には同意だけど。早苗良く食べられたわね」

「え、あ、はい。不思議と私は平気でしたね」

「そんなに不味いか？ これはこれでエキゾチックな味わいがあると思うんだけどなあ。ああ、舌に感じるピリピリとした刺激」

泡をふく早苗を前に、赤紫のキノコを口へと放る魔理沙。もぐもぐと口いっぱいキノコを頬張る姿に霊夢とアリスは顔を引きつらせる。

ここは魔法の森の中にある洞窟の一つ。

魔理沙はキノコの栽培のためにこうした洞窟をいくつもキープしているらしい。狭い上に湿度が多くあまり長居したくはない場所だが、白狼天狗の目もごまかせる入り組んだ洞窟は今打てる最善の隠れ場所だった。

「ま、ともかく無事でよかったぜ。そこら中に殺気立った妖怪が徘徊していて、もうやられちゃったのかと思っただぜ」

「じゃあ、あんたらも？」

「直接戦った訳じゃないけどね。目が血走った天狗連中

がうろついていたから、慌ててここに身を隠したのよ。

一緒に居た魔理沙と一緒にね」

「私は人間の里に向かう途中で天狗に出くわしたんですけど、もう何が何だかわからなかったですが、とにかく逃げのびて、そしたら魔理沙さんとアリスさんに出会いました」

早苗は両手首には包帯をさする。見れば身体もところどころに切り傷が入っていた。心なしか衣装もボロくなっているようだ。

「つたく、あいつらどういうつもりかしら」

そう言っただけアリスはお尻の位置をずらす。どうにも湿った土肌に腰かけるのは性に合わないようで、嫌そうな顔で小刻みに場所を移している。

そんな中、話を切り出したのは魔理沙だった。

「霊夢。何か知ってるんだろ？ この異変について」

不穏な空気から身体からにじみ出てしまっていたのだろう、アリスも早苗も胡乱な目つきで霊夢を見ている。

「……紫の話から大体予想はつくわ」

唇が鉛になったかのように、重々しく霊夢は口を開く。

「要は妖怪の復権を図りたいのよ、紫は」

「妖怪の復権ですか？」

「どういふことだぜ？」

「妖怪ってのは大体が人間に恐れられ、人間を喰らうことで己を保っているの。人が食事を取らねば弱っていくように、妖怪は人に恐れられねば力が弱まっていく。紫はそれを嫌った。それだけよ」

わざと突き放すように霊夢は言う。魔理沙はあからさまに不機嫌顔になり、早苗は顔を蒼白にし、アリスは複雑そうな様子でお尻をずらす。

「で、一番簡単で確実な方法を選んだ。人間が一番恐れること。苦痛と虐殺よ。もちろん、全員殺しては意味無いからあくまで影響の無い範囲で。後は紫次第だろうけど、人間の里を隔離施設みたくして定期的に襲うんじゃないかしら。いつまでも妖怪の恐怖を忘れないようにね」  
そして、人間が完全に絶望してしまわぬようわずかな希望を残す。

妖怪を退治する者。博麗霊夢。

「——つまり、紫は人間を妖怪の家畜にしようって腹だつてののか？」

「端的に言えば、そうね」

魔理沙は不機嫌な顔を隠そうともせず、早苗は悲痛に

口を押さえる。

「そんな。そんなことって」

「くそつ。胸糞悪い。そんなの誰が許すかってんだぜ」

「まったくね。野蛮な考え方だわ。魔界じゃ人間の方が食べてくださいって擦り寄ってくるのに」

そう呟いたアリスに三人の視線が集まる。

「な、何よ？」

「いや、なんでアリスまで追われてんだ？」

「むしろあっち側でしょ？ 一応妖怪なんだし」

「ですよね」

「え？」

きよとんとした目つきで自分を指差すアリス。今の今まで疑問にも思っていなかったらしい。

「な、何でかしらね。多分、私が賛同するとは思わなかったからじゃないかしら。私は人間にもそれなりに接していたから」

「アリス。それはハブられたって言うんだぜ」

「はぶ!？」

「まるで童話のコウモリですな」

「ああ、あったな。パチュリーの図書館で見たんだぜ」

## 【第一章 幻想郷崩壊】

「誰彼構わずヘラヘラしてるからそうなるのよ」

矢つぎに放たれる言葉に、アリスはたじろぐ。だがきつと視線を上げると地面を叩き、身体を乗り出した。

「してないわよ！ だいたいコウモリがどれだけ苦労して生活してるかあんたたち知ってるの!?! 逆さになりながら子どもにお乳やってんのよ！ ただ印象が悪いっただけでいつもいつも悪役にされて苛められる者の痛みがあんたたちにわかる!?!」

わかるわけではないぜ、とそっけなく魔理沙は言い早苗と霊夢は無言で顔を見合わせる。アリスはまだ何か言いたげにわなわなと肩を震わせていたが、三人の様子を見てぶいとそっぽを向く。

「何よ……誰のせいでコウモリになってるのかわかってんの」

蚊の鳴くようなアリスのつぶやき。

それが終わらぬ内に、アリスは魔理沙に抱きしめられていた。

頬にかかる金髪。息もかきりそうな距離に魔理沙の顔がある。

「ま、魔理沙！」

魔理沙の顔を見るよりも薄暗い洞窟を見るほうが百倍簡単で、全身の血液が沸騰していくような感覚に腰が抜けそうになる。

「ちよ、ちよっと二人もいるのに！ で、でも魔理沙が良いなら私——」

「静かに！」

「ぶっ!!」

突き出したアリスの唇は地面に生えたコケに向けられた。魔理沙の声に反応し、霊夢と早苗も身を起こし被い棒を構える。

「……追っ手？」

「誰かが近づいてくる。もしも敵ならいよいよヤバイな。ここは袋のネズミだぜ……って、アリス。何ふて腐れてるんだぜ？」

「べーっーにー。洞窟から出られないコウモリのもの悲しさを噛み締めている最中よ」

「ふーん？」

興味なさげに入り口へと這う魔理沙に別の意味で血を昇らせながら、アリスも魔理沙の尻を追いかけ移動する。

「上海。蓬莱。構えて」

アリスの言葉に呼応し、二体の人形が現れる。魔理沙も八卦炉を取り出し、伏せながら入り口へと狙いを定める。少人数の斥候なのか、足音はたったの三つ分だ。その事実にはアリスは心の中で舌を打ち鳴らす。不意をつけば一方的に殲滅できる数。だが、それをしてしまえば後方に控えているだろう本体にみすみす居場所をばらすことになる。攻撃すべきか、見過ごすことを祈って身を隠すべきか。

「アリス」

「……っ」

ぼんと肩を叩かれ、アリスは隣の魔理沙を見る。

魔理沙はイタズラ好きの悪ガキみたたく歯を見せた。

「まずは私が一発かましてやるぜ。取りこぼしはアリスの人形でやってくれ。人形で囲めば天狗の足も武器にならない。それで終いだぜ」

「……戦うんですか？」

「どの道、見つかる時間の問題だぜ。これだけの妖怪が敵になったんだ。幻想郷に居る以上逃げ場なんてないぜ」  
早苗に不敵に笑んで見せる魔理沙。それに対し、アリスはふっと顔をほころばす。

「そうね！ いけすかない天狗どものケツに剣を突き立ててやるわ！」

「おうその意気だぜ。霊夢たちも後方支援よろしくな！」

「ま、死なない程度に頑張るわ」

「れ、霊夢さんまで」

一人おろおろと各人の顔を見回す早苗。

そんな様子を見ながら、アリスは口をへの字に結ぶ。

「あーあ。こんなことなら、虎の子の秘密兵器を持ってくるんだったわ」

「秘密兵器？」

「そ。長年の研究成果の極地。きつと腰を抜かすわよ。」

私の傑作を見たらね」

「そいつはいいな。今度の宴会で見せてくれよ」

「ええ。今度の宴会でね」

言い合い、二人の視線は入り口へと移す。

足音はもうすぐそこだ。

息を殺し、相手の気配を探る。一步また一步と導かれるように足音が近づいてくる。

おおよそ、五メートル。

互いの鼓動すら聞こえそうな沈黙。魔理沙とアリスは

## 【第一章 幻想郷崩壊】

今一度、目の端に互いの姿を確かめる。

後、四メートル。

ぼそぼそとささやき声が聞こえる。小声で何か言い合っているのか、足音が一度止まる。小聲で何か言い合  
ささやきが止んだ。

「魔符『スターダストレヴァリエ』!!」

「戦符『リトルレギオン』!!」

魔理沙が星を撃ち出し、アリスの人形が天狗に襲いかかる。いかに天狗が幻想郷で最速であろうとも不意を打ったこの攻撃を全ては避けられない。たとえ一撃で仕留められなくとも追撃で仕留める。魔理沙たちがそう考えていた時、

「はあっ!」

天狗の一人が加速した。

まるで一人だけ時間の流れが速まったかのように凄まじい速度で身体を捻り、拳を振るって魔理沙の星を叩き落す。さらにはバネ仕掛けのように足を振り上げ、アリスと人形を繋いでいた糸を断ち切る。

「なっ!」

二人が驚きに目を見開く。だが、やろうと思えばやれ

るはずなのに相手側からの攻撃は襲ってこず、超人的な動きを見せた天狗も拳を突き出した姿勢のまま、ぴたりと動きを止めている。

「……魔理沙さん、アリスさん。同士打ちはごめんですよ」

「へ?」

緊張を解いたかのようにその天狗は拳を下ろし、豊満な胸をほつとまで下ろす。

「せっかく探しに来たというのに攻撃されては割に合わないよな」

「仕方ないでしょう。皆さんには敵に見えているのですから」

小柄な天狗の皮肉な言葉に、長身の天狗は窘めるように苦笑する。残った天狗の一人が不遜な顔のまま指を鳴らす。彼女たちの姿は蜃気楼のように揺らいで行き、やがて焦点が合ったかと思うと見慣れた姿へと変化していた。そこに立つのは二つの細い棒を持つ少女と赤と青の奇妙な羽を持った少女、そしてグラデーションがかつた特徴的な髪を持つ妙齢の女性。

「お、お前ら!」

魔理沙たちの声に命蓮寺の僧侶、聖白蓮はにつこり笑んだ。



「すみませんでした。糸を切ってしまった」

「別に大丈夫。魔力で編んだ糸だしね」

ただでさえ狭い洞窟が、さらに狭くなった。

白蓮は土肌の洞窟でも苦にならないのかきちんとした正座の姿勢で座っている。ナズーリンは小柄な体躯が幸いして壁に背を預けて立ち、ぬえはどこか不満そうな顔で少し離れた場所に寝そべっている。

「二人と一緒に森の中で瞑想をしていたんです。それを終えて帰る途中、妖怪の皆さんに襲われたんです。話し合いはしたんですが、どうにも聞いてくれなくて。天狗の皆さんには申し訳ないことをしました」

そう言い白蓮を自らの手を擦る。血のりの跡と思しき黒ずんだ汚れが、説得後に激しいボディランゲージが交わされたことを物語っている。

「武闘派な坊さんってのも珍しいよな」

「昔は僧侶も武装してたのよ。武蔵坊弁慶を見なさい」  
「でも念仏唱えながら殴りかかってくるお坊さんって何だか凄くおぞましいわ」

「確かに」

ひそひそと語り合う霊夢たち。それを聞いたわけではないだろうが白蓮はしゅんと顔を伏せる。

「私は未熟です。人間と妖怪の平等を語っているのに、暴力的な解決をしてしまいました。後ほんの少しだけ話し合う時間があれば彼女たちとも分かり合えたかもしれないというのに……」

別に殺した訳でもないのに、口に含むように念仏を唱え始める白蓮。

そんな姿を見て、ぬえがぺつとつばを吐く。

「いい加減にしなよ白蓮。分かり合えない奴とは分かり合えない。だから白蓮のしたことは正しいよ。相手をぶつ殺すことが一番手っ取り早い解決法じゃん」

さつ、と白蓮の顔に朱が走る。

「そんなことはありません！ どんな方とも絶対に分かり合えます！ ただそれにほんの少しだけ時間がかかるだけです！」

## 【第一章 幻想郷崩壊】

「はんつ。だったら奴らに腹えぐられても同じこと言うの？ アルカイックスマイルしながら『話せばわかる』とか言うつもり？ バツカみたい」

「ぬえ！」

「二人ともそこまでだ。ここは敵陣の中、大声を出すを見つかるぞ」

「……すいません。思慮が足りませんでした」

まだ何か言いたげだったがナズーリンの言葉に白蓮は姿勢を直す。ぬえは「けっ」と一言、ごろりと白蓮に背を向ける。

「お前ら本当は仲悪いのか？」

「さて、な。ただ言葉は万能ではないし、それだけが真実を伝える手段ではないのだからさ」

「ん？ どういう意味だ？」

魔理沙の言葉にナズーリンははぐらかすように目を瞑る。話はこれでおしまい、と言う態度に魔理沙はキツネにつままれたように「ふーん」とうなる。

横目で自身の顔を見つめるアリスには最後まで気づかなかった。

「それで、これからどうするんだぜ？ いつまでもこ

に隠れても居られないぜ？」

魔理沙の言葉に一同は沈黙を返す。

それを破ったのは早苗だった。

「あ、あの、命蓮寺に集まるというのはどうでしょうか？」

その言葉に霊夢たちは目を丸くする。

「命蓮寺？ あんな里に近いところ、みすみす敵に捕まりに行くようなもんだぜ」

「私としてはもとよりそのつもりでした。残してきたみんなも気になりますし、人々を放つてはおけません」

「白蓮。気持ちはわかるけど、正直敵しいわよ」

「……いや、もしかしたら妙手かも」

「霊夢？」

あごに手を当て、洞窟の土肌を睨みつける霊夢。

きっかり五秒を数えた頃、霊夢はうんと一つ頷き顔を上げる。

「そうね。どの道、動ける者が集まる場所には必要。事態を把握するにしても実際に行動を起こすにしても拠点は必要。それに命蓮寺は——」

「なるほど。そういうことですね」

白蓮もまた霊夢の言葉に頷く。

「ん？ どういうことだぜ？」

「私もよくわからないわ。あんなお寺が何だつてのよ」

「アリスさんとはかく魔理沙さんはもう忘れたんですか。あんなに必死な顔で宝船だと叫んでいたのに」

「——あ！ そうか！」

早苗の指摘に魔理沙は自らの額を叩く。

「そうか、命蓮寺ってあの宝船だったのね」

「そうだぜ。アリスはバカだなあ。今頃気がついたのか？」

「って、あんたにバカ呼ばわりされるいわれはないわ

よ！」

「ぐえー！ 苦しんだぜ！」

先ほどの白蓮たちより余程大きな声で魔理沙を締めあげるアリス。

そんな二人を放置して霊夢たちは話を進める。

「あの空飛ぶ船を手に入れることができればこちらはかなり動きやすくなるわ。少なくとも洞窟に隠れているよりはマシ」

「それに聖輦船には世界を渡る力があります。うまくす

ればこの状況を打破できるかも」

「白蓮、命蓮寺はいまどこにあるかわかる？」

「あ、それは」

「私の出番だな」

腕組みを解き、ナズーリンは胸のペンデュラムを取り外す。それを中指にかけ宙へと垂らす。腕を伸ばし目を瞑る。

「命蓮寺にはこれと同じペンデュラムが置いてある。境界などで遮られていない限りは探し出せるはずだ」

ゆっくりと身体を回していくとある一点でペンデュラムが振れ始める。

「見つけた。ここから東。恐らく博麗神社周辺。やや上向き……上空で待機中か」

「OK。充分な情報よ」

「やるなあネズミ！」

「ありがとうナズーリン」

「何、大した仕事では無いよ」

そう言い、ナズーリンは再び壁に背を預ける。その頬は心なし緩んでいる。

「しかし早苗、今日はやたら冴えてるな。いつもなら『空



## 【第一章 幻想郷崩壊】

飛ぶ基地！ ロマンですね！ これで巨大ロボットがあれば最高です！』とか言い出すのに」

からからと笑う魔理沙に対して、早苗は表情を固まらせる。

「あ、どした？」

「あ、いえ」

眉を寄せて、早苗は魔理沙を見る。

「私ってそういうキャラに見られていたんだなあって」

「うむ。日頃の行いってのは大切なんだぜ」

「ともあれ、命蓮寺に向かうでいいわね？」

霊夢の言葉にぬえを除いた全員が頷く。

その中でアリスは思い出したように切り出す。

「一ついいかしら？ 一度家に戻りたいのだけれど」

「トイレなら恥ずかしがらずにその辺ですればいいんだぜ」

「違うわよ！ ま、武器の補充と言ったところね」

不敵に笑むアリス。いつにない自信がその顔には満ち

ている。

「さっき言ってた秘密兵器か？」

「見てのお楽しみよ」

ふむ、と霊夢は頷く。

「なら、いつそ二手に分かれて動くべきね。各個殲滅される可能性はあるけど、それより少しでも到達できる可能性を上げるべきだわ」

「れ、霊夢さん。少しでもって」

「事実よ。五体満足で駆け抜けられるほど今の状況は甘くないわ。あんただって身をもって知ったんじゃないの？」

白蓮はぐつと拳を握る。

魔理沙も肩をすくめ、げんなりしたように言う。

「ま、私も霊夢の意見には賛成だぜ。まとまって動いて一網打尽ってのは最悪だからな。もちろん、端っからやられる気なんてないけどな。となれば、後はどういう経路で命蓮寺に向かうかだ」

魔理沙は地面に指先でぐるりと大きな円を描き、その左側に○印を描く。

「今居るのが魔法の森のこの辺。間に人間の里があつて、命蓮寺があるのが博麗神社つまりここだ」

○印の右側に『人間の里』と書き、さらに右側に×印を描く魔理沙。

「さてどういうルートで向かうかだぜ。人間の里を避けようと思うと大蝦蟇の池の方から回り込むか、迷いの竹林から向かうか。妖怪の山の方へはできれば行きたくないが」

「ルートは決まっているわ」

「ん？ どこだ？」

祓い棒が一闪、○と×の間を一気に結ぶ。地面に祓い棒を突き立て霊夢は言う。

「人間の里へ直進。強行突破よ」

「ちよっ！ 霊夢！」

「正気ですか霊夢さん！」

慌てふためくアリスと早苗。基本的に押し黙っていたナズーリンもぬえもびくりと眉を動かす。

「本気よ。今の状況じゃこれがベスト」

「……説明してもらってよろしいでしょうか？」

白蓮の問いに霊夢は頷く。

「連中が一番恐れているもの、それは何だと思う？」

「まんじゅうか？」

「愛、かしらね」

「自身の欲でしょう」

「……あんたらね。特に魔理沙とアリスはさつき話をしたでしょうに」

三者三様の答えに頼杖をつきながら呆れ顔になる霊夢。一人、思案顔だった早苗は顔を上げる。

「恐れられなくなること、ですか？」

「正解よ。早苗」

霊夢は頷き、早苗の頭をくしくしと撫でてやる。

瞬間、湯沸かし器のように早苗の顔がぼっと朱に染まる。

「や、やめてください！」

慌てて手を払う早苗。

「何よ？ そんなに気に障った？」

「そ、そういうわけでは………ただ」

右手で左手首を握り締め、押し黙る早苗。どうにも真剣なその様子に霊夢もそれ以上言及するとはしなかった。皆に向き直り、話を続ける。

「連中が恐れるもの、それは妖怪の恐怖を忘れられること。だからこそ里を襲い、徹底的な虐殺劇までやって見せた。私を近づけさせなかったのもそれが理由。なら道を示すことができる最善策」

## 【第一章 幻想郷崩壊】

祓い棒を構え、霊夢は洞窟の外を見据える。その先に起こっているであろう妖怪たちの所業を想像し、怒りに拳を握りしめる。

「戦いの先陣に立ち、恐怖に負けてはいけな」と示す。それが博麗の巫女としての私の役目よ。ならばこそ逃げ隠れなんてできるはずもない」

「ぶっ」

空気が弾けるような音がした。

「あははは！ 霊夢は本当にバカだな！」

立ち上がり、魔理沙は顔中を線にして笑う。そして、ひとしきり笑った後に、牙を剥いて見せる。

「いいぜ。こういうバカも世の中には必要だぜ。霊夢は霊夢の道を行けばいい」

「ちよっと、魔理沙」

「無駄だぜアリス。止めても一人でも霊夢は行くだろうぜ」

「無論ね」

きっぱりと言いつける霊夢。アリスは小さく首を振ると、重いため息をつく。

「……OK。もう何も言わないわ。好きにすればいい。」

けど、私は私のことをやらせてもらおうわよ」

「もちろん構わないわよ。何なら逃げ出した方がいい」

「はっ。万が一の時はそうさせてもらおうわ」

「おお、逃げる逃げる。スカートめくれてパンツ見せないように気をつけてな」

「きゃっ！」

尻を叩く魔理沙に顔を赤くして「何すんのよ！」と抗議するアリス。魔理沙はエロ親父そのものな下卑た笑みを浮かべながら「よいではないかよいではないか」と指を動かす。乳繰り合う二人を余所に再び霊夢は腕を組む。

「後はメンバーね」

「私は霊夢さんと共に行きます」

白蓮は手を挙げ宣言する。魔理沙もアリスも動きを止めて白蓮を凝視し、何気ない動作でぬえも片眼を開いた。

「別にいいけど、同情はいらなからね」

「わかっています。ただ私自身も納得できない所があるので里に向かいたい、それだけです」

「そう。なら何も言わないわ」

肩をすくめる霊夢。白蓮は至極真面目な顔で頷く。

「ありがとうございます霊夢さん」

何となくバツの悪そうな顔をするアリス。魔理沙はどつこいしよとジジイ臭い動作で腰を上げて、軽く首を左右に動かす。ぼきぼきと気持ちいいくらい音が響く。

「白蓮が霊夢と一緒に行くか。んじゃ、チーム特攻野郎が霊夢、白蓮、ぬえにナズーリンだな。チームチキンハートがアリスに早苗に私つてとこかな」

「ものすごく異議を唱えたい名前だけど」

「気にすんなよ！ 生き残るのだから立派な仕事だぜ。他に異議がある奴いるか？」

声は上がらなかった。

「よし。じゃあそれで決まりだな」

「ぬえ、みんなに正体不明の種を」

「はー」

しぶしぶと頷き、ぬえは両手を合わせる。背中に付いた奇妙な羽が微動したかと思うと、その両手の中から線虫のようなものが這い出してくる。

「へえ。そんな風にできるのか」

それは色とりどりの蛇だった。大ききこそ人差し指ほどしかないが、きつちりと三角の頭部に小さな目が二つ付いている。

身をよじりながらぬえの手の平に整理した蛇はじつと霊夢たちを見つめ、やがてふよふよと海を行く稚魚のように宙を飛び腕に絡みつく。

「言っとくけどばれても私のせいじゃないからね」

「ありがとう、ぬえ」

「……ふん」

「さて、行くとしますか」

辺りの様子を窺い、霊夢たちは外へと向かう。

天には金の皿のような月が浮かんでおり、思いの外明るい。わずかに浮かぶ雲は駆け足ぎみに空を流れて、鳥の声も蟲の音も今は聞こえない。

「それじゃあ、命蓮寺でね」

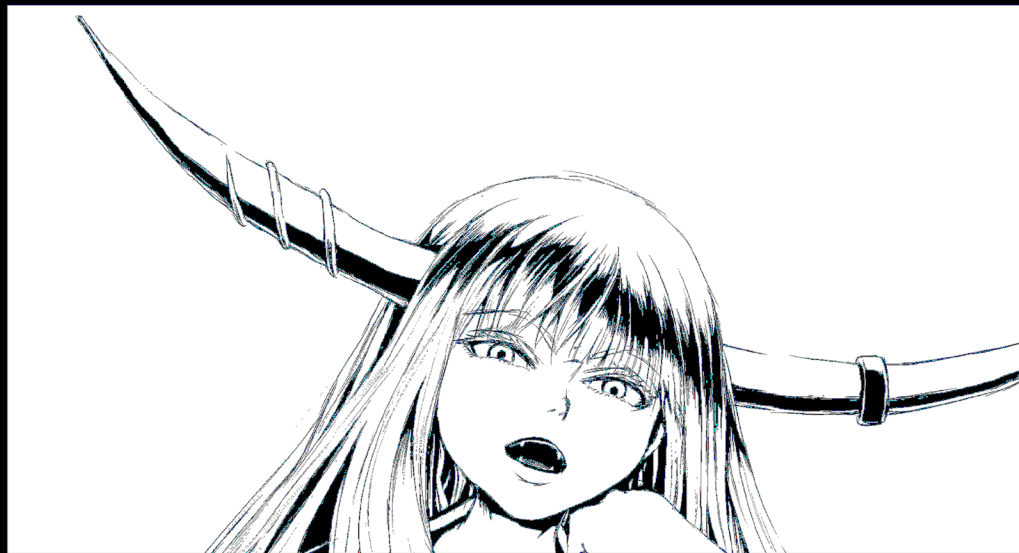
「ああ、命蓮寺で」

こつんと拳を合わせる霊夢と魔理沙。そしてそれぞれの向かうべき場所へと足を向ける。少女たちが大地を蹴る。木々の間を風のような速度で駆け抜け東と北へ向かう。散ばった木の葉はゆらゆらと揺れて、地面に落ちる。

少女たちの去った後には、ぼっかりと口を開けた洞窟だけがそこに残る。

爛々と輝く月だけが洞窟の闇を浮き彫りにさせていた。





**続きは本編でだ**